

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04458

研究課題名(和文)「主体性が育つ」場としてのアート教育の対話的授業論からの検討

研究課題名(英文) Analysis of the art education as the arena for children's growing agency from the standpoint of dialogic pedagogy

研究代表者

宮崎 清孝 (Miyazaki, Kiyotaka)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：90146316

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトは幼稚園でのアート教育が子どもの主体性を育てるのではないかという仮説を検証するために、幼稚園での子どものアート活動を観察した。対話主義の立場から、アート制作過程での作品に対する大人の提案に対し、子どもたちがどのように応答するのかに焦点を当てた。子どもたちは受動的に受け入れることなく、能動的に選択し、また受け入れる場合でも自分なりのものへ統合しており、そこに子どもの主体性が表れていた。この園での大人は子どもに提案するだけでなく、子どもから出てきた考えを面白がり、それを学ぶ対話的な存在であり、このような大人の在り方が子どもの主体性の育ちに重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at examining the possibility of the art in the early childhood education and care for developing children's agency and tried, in particular, to identify how the children's agency work in their art production. The project was based on the dialogic pedagogical view derived from Bakhtin. The research was mainly conducted in a Japanese kindergarten in which art is at the center of the curriculum. Children's agency were most clearly shown in children's responses to adults' proposal on the artwork. To adults' proposal, children did not just accept or reject them, but responded actively. They sometimes integrated them to their original ways of production, or sometimes rejected them but after watching them carefully. The adults not only proposed their ideas but also evaluated children's responses highly and learned something new from them. Such a way of being of adult as dialogic teacher would be vital for helping children to develop their agency.

研究分野：認知心理学・教授学習過程論

キーワード：アート教育 保育 対話主義授業論 アクションリサーチ カリキュラム構成・開発

## 1. 研究開始当初の背景

申請者のこれまでの研究では、playworld と呼ぶ教育・保育の考え方を開発した Lindqvist(1995)の理論に触発され、playworld 研究に興味を持つ海外の研究者たちと協働しつつ、想像遊び活動と結びつけることで子どものアート活動を豊かにする教育プログラムの開発をおこない、一定の成果を上げてきた (Marjanovic - Shane, et al., 2011; 佐木・宮崎, 2015)。より最近ではロシアの言語哲学者 バフチンの対話論に基づく教授学習理論 (Matusov & Miyazaki, 2014) を理論的な枠組みとして採用するようになった。

この研究の流れの中で、アート活動と想像遊びが相互を豊かにできる関係があることが明らかになったが、他方改めて、子どもの遊びの活動と異なるアート活動の意義はどこにあるのかが問題となって現れてきた。そこで、アートでは物を作る者として自己が経験される(作者性、あるいはより一般的理論的に著者性 authorship)(Matusov, 2011)という点に着目し、アート活動の意義を「主体性が育つ」という点に求められるのではないかと考えるようになった。

### <参考文献>

Lindqvist, G. (1995). *The aesthetics of play: A didactic study of play and culture in preschools*. Uppsala University.

Marjanovic-Shane, A., Ferholt, B., Miyazaki, K., Nilsson, M., Rainino, A., Hakkarainen, P., Pesic, M., & Beljanski - Ristic, L. (2011). Playworlds: An art of development. In C. Lobman, & B. O'Neill (Eds.), *Play and performance: Culture studies, vol. II*. MD: University Press of America.

Matusov, E. (2011). Authorial teaching and learning. In E. J. White & M. A. Peters, (Eds.), *Bakhtinian pedagogy: Opportunities and challenges for research, policy and practice in education across the globe*. NY: Peter Lang.

Matusov, E., & Miyazaki, K. (2014). Dialogue on dialogic pedagogy. *Dialogic Pedagogy: An International Online Journal*, 2, pp. 1-44. 10.5195/dpj.2014.121.

佐木みどり・宮崎清孝(共編) (2015). はっけん とぼうけん: アートと協働する保育の探求. 創成社.

## 2. 研究の目的

本研究はバフチンの対話論に基づく対話主義教授論 dialogic pedagogy の立場から、就学前教育の場面で、アート活動が子どもの「主体性」を育てるとする仮説を検討しようとした。その際、アート活動と親近性の高い活動である想像遊び活動場面との比較をおこないつつ、アート活動が子どもの「主体性」の育ちにとって持つ意味を明らかにしようと考えた。

理論的にはバフチンの対話理論に依拠しつつ、とりわけその著者性 authorship についての議論(バフチン 1995、Matusov, 2011)を参

照しながら「主体性」という概念の意味について検討しようとした。実証的にはアート活動と想像あそびを2つの柱とする日本の幼稚園での保育活動を対象とし、そこで2つの活動のあり方、また保育者の考え方を探ることから、アート活動と遊びの関係、さらにアート活動で見られる子どもの「主体性」のあり方に迫ろうとした。

なおその際欧米の、いわゆるレッジョエミリア (Vecchi, 2010) 的な志向をもつプリスクールの実践との比較もおこなおうとした。これはいわゆる文化比較を意図したものではなく、それらの保育思想でアートと遊びの関係が日本の対象園とは異なっていることが予想され、その違いがアート活動における子どもの「主体性」のあり方に違いをもたらすだろうと考えたためである。

### <参考文献>

(上で既出のものは略す。以下も同様とする。)  
バフチン, M. (1995). ドストエフスキーの美学. 筑摩書房.

Vecchi, V. (2010). *Art and creativity in Reggio Emilia*. London: Routledge.

## 3. 研究の方法

### (1)理論的側面

基礎となる対話主義授業論 (dialogic pedagogy) について、バフチンの対話論(バフチン 1995 など)に基づき欧米で発展している対話主義授業論の研究者と交流しつつ、理論的な枠組みを構築する。その際、教科を超えた普遍性をもつ部分の検討もおこなう。これに関連して、アート以外の教育実践の観察もおこなう。

### (2)実証的側面

主として幼稚園での保育実践の観察をおこなう。主たる対象はこれまでの科研費研究でも対象としている岐阜県下の一私立幼稚園である。本幼稚園ではアートに深い関心を持ち、他方想像遊びをもう一本の柱とした実践をおこなっているため、本研究に適している。なお本園では夏期休業中にプロのアーティストを招き子どもとともに作品を作るアートワークショップをおこなっているが、これが観察の主対象となる。他に小学校でのアートの授業なども観察の対象とする。また欧米の協働している研究者の対象としているプリスクールも観察する。

## 4. 研究成果

### (1)対話主義授業論の理論的展開

研究の基礎となる理論である対話主義授業論の枠組み作りについては、バフチンや欧米の対話主義授業論研究の文献調査や欧米の研究者との交流を通して大きな進展があった。その中で次の3点を研究のための基礎的な理論仮説として明確化できた。

・教育・保育場面での対話は<子ども-学習の対象-大人(教師・保育者)>の三項関係からなる構造を持つこと。そこで対話的であると

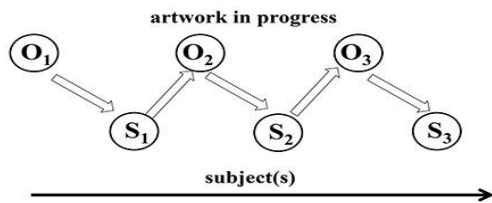
は「学習対象の真理性を巡り、子どもと大人(教師・保育者)が対等の権利を持つ(パフチン 1995)」ことであること。

・その関係が生じるために、教師・保育者は子どもの持つ、自らが持つものとは違う「問い」に気づき、それを子どもたちに明確にしていくことが必要である。それを通して教師もまた「学習の対象」について学ぶ。  
 ・子どもの「主体性」はこのような関係の中で育っていく。

これらについては「5, 主な研究論文など」のうちの西林克彦・宮崎清孝・工藤与志文(2017)、Miyazaki(2017b: 2017c)などで発表している。第一点については、欧米の研究で不明確な形では述べられているものの、それを明確にした点で独創的な貢献であると考えている。また第二点についてはさらに一層の理論的洗練が必要であるが、これまで対話と「問い」の関係に触れたものがほとんどない点で、新しい提案であると考えている。

### (2) アート制作過程における対話的過程

上で述べた対話的な過程としてアート制作過程を分析するため、次のようなモデルを作った。



図で、三項関係が  $S_1 - O - S_2$  の間に存在する。O は Object であり、この場合制作途上の作品あるいはその一部分である。S<sub>1</sub>S<sub>2</sub> は制作者であるが同じ人間の場合、違う人間の場合、またその特殊な場合として子どもと教師・保育者の場合があり得る。制作の過程で S が O を変えていく。図でいえば S<sub>1</sub> の働きかけ(何らかの制作行為)により O<sub>1</sub> が O<sub>2</sub> へと変化する。それを S<sub>2</sub> が見てさらに新しい制作行為をおこない O が O<sub>3</sub> へと変化する。この場合 S<sub>2</sub> は O を通して S<sub>1</sub> から働きかけられている。言い換えれば S<sub>1</sub> は O を通し、S<sub>2</sub> に O についての新しい提案をおこない、それを受けて、時にはその提案を完全に受け入れ、時には完全に否定しつつ、S<sub>2</sub> はさらに O を変えていく。これが制作における三項関係であり、O を通して S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> が対話していると捉えることができる。

その一例を図示する(宮崎・アリケン, 2016より)。これは2016年度に研究対象の幼稚園の夏のワークショップでの観察事例である。ここで1クラスの子どもたちがアーティストや保育者とともに、「深海潜水艇」を作っていた。下の事例では3人の子ども(C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>, C<sub>3</sub>)が大きな発泡スチロールの箱状のものを用い、それにいろいろ加えて、潜水艇の付属品

である「無人探索用カメラ」を作った。

09:47 中に箱入る(C<sub>1</sub>)  
 09:50 長いガム子貼る(C<sub>1</sub>)  
 箱を穿る(C<sub>1</sub>, 平行)  
 09:52 プラ箱押し込む(C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>)  
 09:53 もう一つのプラ箱箱につけられる(C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>)  
 2015-8-7 9:55:27 AM

09:56 もう一つのプラ箱をつける  
 C<sub>1</sub> 持ってくる(提案)  
 C<sub>1</sub> つける(受容)  
 10:00 長い棒をつける  
 C<sub>2</sub> 持ってくる(提案)  
 C<sub>2</sub> ももに押し込む(受容)  
 10:08 プラ皿を載せようとする  
 C<sub>1</sub> プラ皿を載せようとする(提案)  
 C<sub>1</sub> それを取り返す(拒否)  
 10:13 小さな円盤を棒の先端に  
 C<sub>1</sub> 小さな円盤を棒の先端に  
 C<sub>1</sub> それを渡っている(平行)

10:20 ガム子を貼る  
 C<sub>1</sub>/C<sub>2</sub>  
 10:25 ペットボトルの蓋2個つけたものが付けられる  
 C<sub>1</sub>/C<sub>2</sub>  
 10:28 セロテープの芯をつける  
 C<sub>1</sub>

10:37 半分に割ったプラ皿をつける  
 C<sub>1</sub>  
 10:43 半分に割ったプラ皿を取り取る  
 C<sub>1</sub>  
 10:48 長い棒をつける  
 C<sub>1</sub> が持ってくる(提案)  
 C<sub>1</sub> と C<sub>2</sub> 一緒に付ける(受容)

完成  
 2015-8-7 1

Legend:  
 C<sub>1</sub> はじめよに置く(提案)  
 C<sub>1</sub> 自分で取り下げる(拒否)  
 C<sub>1</sub> の提案を自分で実行(受容)  
 C<sub>1</sub> それを拒否  
 C<sub>1</sub> 提案を拒否に置く  
 C<sub>1</sub> 受容 プラ箱を箱につける

Legend:  
 C<sub>1</sub> ペットボトルの蓋を探してきて、よに置く(提案)  
 C<sub>1</sub> それを受け取り、棒のガム子を置く(受容)  
 C<sub>1</sub> もう一つペットボトルの蓋を渡す(提案)  
 C<sub>1</sub> それを受け取り、よの蓋を一緒にする。発泡スチロールに付ける(受容)

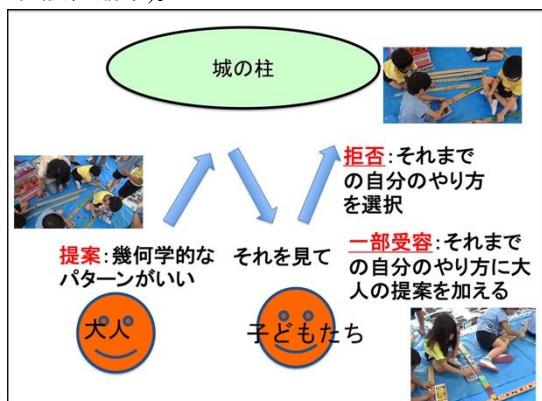
図中赤字で示したのが子どもたちの相互の働きかけであり、基本は「提案」とそれに対する「受容」「拒否」からなっている。「提案」には「新しい材料を持ってくる」「新しい場所に置く」など、「受容」には「持ってきた材料を付ける」「受け取ってさらに変化を加える」など、また「拒否」は「持ってきた材料を退ける」などだが、「自分で取り下げる」というものも入る。

なおこのモデルについては「5, 主な発表論文など」のうちの「図書」欄の Miyazaki, K. (2017)において、これとは別の事例を用い発表した。

### (3) 対話的過程の中での子どもの「主体性」の現れ

Matusov(2011)は主体性 agency を、パフチンの理論に依りつつ著者性 authorship という用語で考えている。それによると著者性とは「関連するコミュニティ、および参加者本人により完全に、あるいは部分的に認められたユニークな創造的貢献への参加者の努力」である。上に分析した過程での子どもたちの提案、授業、拒否といった行為は、それが制作への「創造的貢献」である意味では、本質的にすべて著者性、主体性の表れである。しかしそのことが特に明確に現れる場面がある。それは大人が制作に関わり、大人の側の提案があり、それに対して子どもの側の選択が明らかにおこなわれる場面である。大人の提案を一方向的に受容するのではなく選択する行為に、子どもの著者性が明確にあるということが出来るだろう。

観察した幼稚園でのアート制作場面では、そういう場面がよく見受けられた。以下その代表例を見る。これは2017年のワークショップでの事例である。子どもたちはアーティスト(ドイツ人)とともに、ドイツのお城を段ボールで作っていた。子どもたちにとってこれはドイツの怪獣である“リンドワーム”の住むところであった。取り上げる事例では、子どもたち(男の子4人、女の子4人)がお城の“柱”である段ボールを細長く切ったものに模様を付けていた。男の子たちはいずれも“リンドワーム”を描き、女の子たちはいろいろな色に塗り分けていた。アーティストはこれに対し、ドイツの実際の城と同じように柱の模様は柵目や丸の連鎖であるほうがよいと感じ、保育者にそれを子どもたちに提案するよう依頼した。それを受けて保育者は子どもたちに対し、たとえば丸の連鎖の場合ならば「リンドワームの目だよ。リンドワークのお城だとわかるよ」などといいながら、実際に何枚も描いて見せた。すべての子どもたちが、保育者の描く様子を熱心に見ていた。にもかかわらず、2名以外はその提案をまったく拒否したのである。また残りについても、1名は部分的に提案されたパターンを追加し、残りの一人は柵目のパターンを受容したものの、そのパターンによって分けられた各部分に、前やっていたのと同様異なる色を塗り分けたのである。このように2名とも、単純な受容ではなく、自分のやっていた描き方の中へ提案を利用して発展させる道筋を選んでいた(下図。Miyazaki, et al., 2018 で用いたものを和訳、編集)。



これらの事例から、アート活動においては制作途上の作品を媒介とし、それ以前の制作行為に対して新しい制作行為を作り出していくところに「主体性」の契機があること、また保育場面では大人の側の提案に対して子どもが盲従したり無視したりするのではなく、子どもがそれに対して選択をおこなうという形で「著者性」を発揮する場面があることが明らかになった。

なお、(1)から(3)までを含み、これまでの研究の包括的な報告を遊びに関する国際的なハンドブックに掲載した(「5. 主な研究論文など」の「図書」欄、Miyazaki, 2017)。

#### (4)達成が不十分だった点

研究目的を立てた時点では、アート活動を想像遊び活動と比較し、その違いから「主体性」について考えていく計画であった。しかしこの点については不十分にしかおこなえなかった。まず、かなりの文献探索をおこなったが、内外含め、アート活動と遊び活動の違い、ないしは関係について明確に述べているものを発見できなかった。実践の分析を通し、両者の違いがアート活動では作品という一つの結果へ向かう活動であるが遊びにはそのような結果が存在しないのではないかと、という暫定的な結論を得ているが、理論的な位置づけも含め、まだ十分なものではない(Noguchi, & Miyazaki, 2017; 野口・宮崎, 2018)。

もう一点、最初の研究目的では欧米のプリスクールの実践との比較も予定していた。実際の観察に関してはそのための時間を得ることができなかったが、Miyazaki, et al. (2018)に結果したように、欧米の研究者たちとの情報、意見交換はおこなうことができた。それでも上に述べたアート活動と遊びの関係については明確にならなかったが、むしろ類似点として、下の(5)で述べる問題があることが明らかになった。

#### (5)新しく出現してきた問題

この研究を通して、子どもの「主体性」が大人(保育者)の側のある在り方と大きく関連しているのではないかと、という仮説が生まれてきた。対象とした幼稚園はいわゆる自由保育の幼稚園と異なり、アート活動の中で大人・保育者の側が様々な提案を子どもに対して積極的な提案をおこなう。だがそれと同時に、その提案に対して子どもの側から新しい制作行為が出てきたとき、それが拒否であったとしてもそれを面白がり、アート作品への新しい提案として自らの学びの対象とする。たとえば(3)で見た事例の場合にも、その提案を否定して続けた元々の制作行為に対し、アーティストも保育者も「その方が面白かった」と自らの考えを変えた。単に見守るだけではなく、また子どもしたことだから評価するというのでもない、子どもからの真正の学びをおこなうことのできるこのような大人・保育者の在り方が、子どもの「主体性」の育ちにとって重要なのではないかと。なお、(4)で述べた欧米の研究者たちとの交流からも、Miyazaki, et al.(2018)のタイトル Putting the teacher in the picture が示すように、このような大人・保育者の在り方を研究の対象とすることの重要性が示唆されているのである。(引用文献は上で既出のもの、及び「5. 主な発表論文等」に載せるものであり省く。)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)



〔雑誌論文〕(計 2 件)

- 1, 西林克彦・宮崎清孝・工藤与志文 (2017). 教科教育に心理学はどこまで迫れるか. 教育心理学年報, 56, 202-213. DOI: 10.5926/arepj.56.202
- 2, Miyazaki, K. (2017). Comment on Groy's essay "Between Stalin and Dionysus: Bakhtin's theory of the carnival". *Dialogic Pedagogy: An International Online Journal*, 5, pp. 47-52. DOI: 10.5195/dpj.2017.220

〔学会発表〕(計 12 件)

- 1, Miyazaki, K., Ferholt, B., Nilsson, M., Lecusay, R., Paananen, M., & Rainio, A. P. (2018). Putting the teacher in the picture: Perspectives from ECE in Japan, Sweden, Finland and Brooklyn. Presented at the 2018 conference of American Educational Researchers Association. New York, U.S.A. 2018/4/16.
- 2, 野口紗生・宮崎清孝 (2018). 子どものアート活動と遊びをどう特徴付けるか - 幼稚園での協働的制作場面を対象として - 日本発達心理学会第 29 回大会発表論文集, p.340. 仙台市. 2018/03/24.
- 3, 宮崎清孝 (2017a). 授業における「問い」の問題-対話主義授業論の立場から. 日本教育心理学会第 59 回大会. 名古屋. 2017/10/09.
- 4, Miyazaki, K. (2017b). Questioning as the key for the dialogue to develop: Bahktin encountering with Gadamer. Paper presented at the 16th International Bakhtin Conference, Shanghai, China. 2017/9/7.
- 5, Miyazaki, K. (2017c). Triadic relations between students, teacher, and the learning contents as the basis of the dialogic pedagogy. Paper presented at 5th International Conference of International Society of Cultural and Activity Research. Quebec City, Canada. 2017/8/29. Book of Abstract 312.
- 6, Noguchi, S. & Miyazaki, K. (2017). How play can be distinguished from art in children's activities in the early childhood education: In the case of an art workshop. Poster presented at 5th International Conference of International Society of Cultural and Activity Research. Quebec City, Canada. 2017/8/30. Book of Abstract 340.
- 7, 野口紗生・宮崎清孝 (2017). 幼稚園での協働的制作場面におけるあそびとアート活動の差異. 日本発達心理学会第 28 回大会. 広島市. 2017/3/26.
- 8, 宮崎清孝 (2016). 授業における三項関係-対話主義授業論の立場から. 日本教育心理学会第 58 回大会. 高松市. 日本教育心理学会第 58 回大会論文集, p. 163. 2016/10/08.
- 9, 宮崎清孝・アリケン アルズグリ (2016). 幼稚園でのアートワークショップにおける協働的制作活動 -大人・子ども・作品の三項関係に着目して. 日本発達心理学会第 27 回大会. 札幌市. 2016/4/29.

10,野口紗生・宮崎清孝 (2016). 幼稚園でのアートワークショップにおける協働的制作活動②-子どもの制作と想像あそびの創発的展開. 日本発達心理学会第 27 回大会. 札幌市. 2016/4/29.

11,齊藤萌木・飯窪真也・宮崎清孝・村山功・山住勝広・白水始 (2016). 学校内外の学びをつなぐ(1)パネルディスカッション. 日本認知科学会第 33 回大会. オーガナイズドセッション OS11-1. 札幌市. 2016/9/16 .

12, Miyazaki, K. (2015). Let's make the familiar term "imagination" strange: Generating the world not there or exploring the real world. Paper presented at 10th Imaginative Education Research Group International Conference. Vancouver, Canada. 2015/7/2.

〔図書〕(計 1 件)

1, Miyazaki, K. (2017). Play and art in a Japanese early childhood setting. In T. Bruce, P. Hakkarainen, & M. Bredikyte (Eds.) *The Routledge International Handbook of Early Childhood Play*. New York: Routledge. (pp.125-134)

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮崎清孝 (Miyazaki, Kiyotaka)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号 : 90146316

(2)研究分担者

( )

研究者番号 :

(3)連携研究者

( )

研究者番号 :

(4)研究協力者

アリケン アルズグリ (Aiken, Arzuguri)

佐竹 貴明(Satake, Takaaki)

野口 紗生 (Noguchi, Saki)